

22J-pm01

トリプルネガティブ乳癌の予後不良バイオマーカーの探索

○皆川 貴美乃¹, セドキーナ アンナ¹, 熊井 俊夫¹, 佐藤 工¹ (¹聖マリ医大)

乳癌のサブタイプのひとつである basal-like 乳癌は予後不良であり、多くはエストロゲン受容体、プロゲステロン受容体、HER2 を発現していない（トリプルネガティブ:TN）ことから、ホルモン治療やトラスツズマブによる治療の対象にならず、治療方法が限られている。亜型分類を実臨床に応用するために多くの研究がなされているが、実際はエストロゲン受容体、プロゲステロン受容体、HER2 の発現を確認するにとどまっている。この治療法の限られた予後不良と関連が深い TN 乳癌の中でさらに予後不良を示唆するバイオマーカーの確立と、この予後不良群に対する効果的治療方法の確立は重要である。そこで本研究では、TN 乳癌の予後不良を示すバイオマーカーの同定と効果的治療方法の確立を目的とし、バイオインフォマティクスを用いて2つのデータセット(TCGA, GSE58812)を解析した。その結果、TN 乳癌の予後不良バイオマーカーの候補としてスフィンゴミエリン代謝酵素である SPTLC2 が同定された。

SPTLC2 はスフィンゴ脂質であるセラミドの発現を増やし、セラミドは抗腫瘍効果がある一方で、その代謝産物は腫瘍促進効果があることが報告されている。また、乳癌ではセラミドの発現量が正常組織と比べ増加するという報告もあり、スフィンゴ脂質と癌が密接に関連することが示唆されるが、癌の増殖と抑制への関連は未だ解明されていない。今後は、SPTLC2 過剰発現乳がん細胞株を用いて効果的治療薬の検討を行う予定である。